高等部普通科における英語ネイティブ講師（ALT）と日本人英語教師のティーム・ティーチング

～授業実践及び質問紙調査結果～

松本　邦子・田万　幸子・澤口　真弓・田中　豊大

高等部普通科では令和 2 年度から，1 学年の必修科目「コミュニケーション英語Ⅰ」，2 学年の必修科目「英語表現Ⅱ」，2 学年の学校設定の選択科目「英語演習」，3 学年の必修科目「コミュニケーション英語Ⅲ」それぞれ毎週 1 時限 50 分の授業で，英語ネイティブ講師と日本人教師のティーム・ティーチングを行っている。2 年目となる今年度は，英語ネイティブ講師と日本人教師とティーム・ティーチングによる授業を定期的に受けることを通して，生徒が「英語ネイティブ講師の来校頻度」「ネイティブ話者とのコミュニケーションの理解度」「英語コミュニケーション能力」「コミュニケーション手段」のそれぞれの側面から，自身の英語学習をどのように評価しているのかを調査した。質問紙調査の結果，約 3 分の 1 の生徒が「英語ネイティブ講師の来校頻度を増やしてほしい」，約半数の生徒が「英語でのコミュニケーションを概ね理解できている」と回答し，8 割を超える生徒が「自分の英語力が高まった」と評価した。

キー・ワード：英語ネイティブ講師　理解度　コミュニケーション能力　コミュニケーション手段

1　はじめに

高等部普通科では，平成 30 年度から令和 2 年度までの 3 か年受託した「文部科学省特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）」の英語の授業実践の一環として，タブレット端末を活用した英語の話者とのコミュニケーション活動を行った。受託 3 年目にあたる令和 2 年度には，年間を通して（4，5 月は新型コロナウィルス感染症感染拡大による休校のため 6 月から 1 月の 8 か月間）通常の英語科の授業枠の中で，英語ネイティブ講師と日本人英語教師のティーム・ティーチングを試行した。令和 2 年 12 月に実施した生徒対象の質問紙調査の結果から，多くの生徒が，英語ネイティブ講師が授業に来ることを肯定的に捉えていることがわかり，事業委託終了後の令和 3 年度も，令和 2 年度と同じ英語ネイティブ非常勤講師とティーム・ティーチングを行い，本実践を継続した。

今年度は，新たな質問紙調査を作成し，その結果を基に，英語ネイティブ講師と日本人英語教師のティーム・ティーチングが生徒の学びに与える影響を調査及び分析した。今回の質問紙調査の結果は，高等部普通科 2 年生及び 3 年生にとっては 2 年間の授業に関する回答，1 年生にとっては 1 年間の授業に関する回答となる。

授業の進め方は，各学年各学習グループのそれぞれの科目を担当する日本人英語教師に委ねられている。コミュニケーションを重視する授業展開ではタブレットアプリ「iMessage」を主に用いて授業を展開することが多く，ライティングを重視する授業展開では「ロイロノート・スクール」のカードの提出，添削及び返却の機能を用い，生徒のライティングを基に，ネイティブ英語講師が黒板やカードにキー・ワードやイラストを書いて口話で説明をすることもある。あるいは，話した言葉を音声認識で文字化する「しゃべり描き」というアプリを用いて，英語でコミュニケーションをとることもある。

2　質問紙調査の内容

高等部普通科の日本人英語教師 4 名で質問紙調査（Table 1）の調査項目を検討し，「英語ネイテ

ィブ講師の来校頻度」「ネイティブ話者とのコミュニケーションの理解度」「英語コミュニケーション能力」「コミュニケーション手段」の４つの側面から質問紙を作成した。

高等部普通科では，必修科目は習熟度別に 3 グループに分かれて授業を行っているため，それぞれのグループに英語ネイティブ講師が来る時間は１回につき 15 分～30 分程度，頻度も毎週～数週間に 1 度であり，各グループ及び各生徒が英語ネイティブ講師と関わる機会は決して多いとは言えない。そこで，生徒自身が英語ネイティブ講師の来校頻度についてどのように感じているのかを知る必要があると考えた。

また，英語ネイティブ講師と日本人英語教師，あるいは英語ネイティブ講師と生徒達とのコミュニケーションを各生徒がどの程度理解しているのか，理解が難しい部分が何であるのかを知る必要もあると考えた。

更に，生徒が授業を通して，リスニング力，スピーキング力，ライティング力，及び語学以外の知識の習得，英語でのコミュニケーションに対する慣れ，知りたい，発信したいという意欲について，どの程度向上したと自己評価しているかを知るとともに，授業を通してどのような能力を身につけたいと考えているかを知ることによって，今後の授業内容や方法等を検討する必要があるとも考えた。

最後に，読話や聴覚活用が難しい英語でのコミュニケーションにおいて，生徒がどのような情報を手がかりにして英語を理解しているのか，どのようなコミュニケーション手段で英語ネイティブ話者と話すことを希望しているのかを知り，今後の授業での ICT 活用を更に工夫したいとも考えた。

Table 1　質問紙調査

英語ネイティブ講師についてのアンケート調査
3 学年共通

1　ネイティブ講師が授業に来る頻度について答えてください。
［ ］もっと頻繁に来て欲しい
［ ］今のままでよい
［ ］もっと少なくてよい

2　1で「もっと頻繁に来て欲しい」を選んだ人は、理由や望ましい頻度をおしえてください。
理由［　　］
頻度［　　］

3　1で「もっと少なくてよい」を選んだ人は、理由をおしえてください。
理由［　　］

4　ネイティブ講師、日本人教師、クラスメートの英語でのやりとりは理解できていますか。
［ ］概ね理解できている
［ ］時々理解できないことがある
［ ］ほとんど理解できていない

5　4で「時々理解できないことがある」「ほとんど理解できていない」を選んだ人は、何を理解することが難しいのかをおしえてください。（複数回答可）
［ ］英語
［ ］やりとりの内容
［ ］文字化されなかった情報
その他［　　］

6　授業でのネイティブ講師の役割や、授業内容についてどう思いますか。（複数回答可）
［ ］ネイティブ英語講師と日本人英語教師とのティームティーチングがよい
［ ］ネイティブ英語講師が主に授業を進めてほしい
［ ］日本人英語教師が主に授業を進めてほしい
［ ］教科書を使った授業ではなく、講師の出身国の政治、文化、歴史などについての話をしてほしい
［ ］教科書を使った授業がよい
その他［　　］

7　ネイティブ講師とのコミュニケーションについての質問です。聞く時、話す時に分けて答えてください。
ネイティブ講師の話を聞く時にあなたが参考にしている情報として、頼りにしている順に番号を記入してください。全く参考にしていない情報には×を記入してください。
［ ］音声
［ ］口形
［ ］手書きの文字や絵（ロイロノート・スクールや黒板等　音声認識による文字化を含む）
［ ］iMessage
［ ］その他［　　］
英語を話す時にあなたが使う手段として、使いたい順に番号を記入してください。使いたくない手段には×を記入してください。
［ ］音声（音声認識による文字化を含む）
［ ］手書きの文字や絵（ロイロノート・スクールや黒板等）
［ ］iMessage
［ ］その他［　　］

8　ネイティブ講師が来ることによって、あなたの英語コミュニケーション力は高まったと思いますか。
［ ］非常にそう思う
［ ］どちらかといえばそう思う
［ ］どちらかといえばそう思わない
［ ］全くそう思わない

9　8で「非常にそう思う」「どちらかといえばそう思う」を選んだ人は、具体的にコミュニケーション力のどのような側面が高まったと思いますか。(複数回答可)
［ ］(聴覚活用による) リスニング力
［ ］(文字化による) リスニング力
［ ］スピーキング力 (その場で発言する力)
［ ］ライティング力 (時間をかけて英作文をする力)
［ ］海外の政治、文化、歴史等に関する知識
［ ］英語でやりとりをすることへの慣れ
［ ］海外のことを知りたいという意欲
［ ］日本のことを海外に発信したいという意欲
その他［　　］

10　ネイティブ講師と日本人教師のティーム・ティーチングを受けることを通して、今後あなたが高めたいコミュニケーション力の側面をおしえてください。(複数回答可)
［ ］(聴覚活用による) リスニング力
［ ］(文字化による) リスニング力
［ ］スピーキング力 (その場で発言する力)
［ ］ライティング力 (時間をかけて英作文をする力)
［ ］海外の政治、文化、歴史等に関する知識
［ ］英語でやりとりをすることへの慣れ
［ ］海外のことを知りたいという意欲
［ ］日本のことを海外に発信したいという意欲
その他［　　］

11 ネイティブ講師と日本人教師のティーム・ティーチングに関する要望があればおしえてください。(自由記述)
［　　］

3　英語ネイティブ講師の来校頻度

生徒が希望する英語ネイティブ講師の来校頻度は以下の通りである。(Table 2)

Table 2　英語ネイティブ講師の来校頻度

(n=76)	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
もっと頻繁に来てほしい	3	2	1	7	2	3	1	4	1	24
今のままでよい	6	8	4	4	7	4	8	6	5	52
もっと少なくてよい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

Table 2 中の 1，2，3 は学年を，イ，ロ，ハはそれぞれ習熟度上位，中位，下位グループを表す。2 学年の習熟度上位グループで「もっと頻繁に来てほしい」と回答した生徒の比率が高いが，それ以外では，習熟度による差異はほとんど見られない。

「もっと頻繁に来てほしい」と回答した生徒 24 名のうち，好ましい来校頻度を回答した生徒数は 23 名で，その半数以上の 12 名は「1 週間に 2〜3 回」と回答した。また，もっと頻繁に来てほしい理由として「楽しい」「英語を使う感覚がよく身につく」「いつも 20 分で中途半端だからまだ話し足りない」「将来に向けて英語ネイティブの人とのやりとりの経験を積んでおきたい」「日本との文化の違いを学ぶことができる」「学んだ単語や文法を実際に使うことで熟語や慣用句として使えるようになり、もっと楽しく話せるようになると思う」「本場の英語に触れる機会がなかなかないのでゆっくり英語で会話をする時間が欲しい」「昨年度よりも来る回数が減ったような気がする」「異文化圏の人と触れ合うことができる唯一の時間である」「海外について新しい知識が身につく」「似たような意味の単語でも、どちらを使う方がいいのかといった英語を使う人の感覚を学べる」「英語の文法のしくみなど、外国人の観点がわかるので、どのように表現すればよいか考えられる」「コミュニケーション英語と英語表現の両方に来て欲しい」「英作文の力を上げたい」などが挙げられた。生徒は英語ネイティブ講師とのコミュニケーションをただ楽しいと感じているだけではなく，英語ネイティブ話者とコミュニケーションをとる機会の重要性や，より長い時間，より頻繁にコミュニケーションをとることで新たな知識を身につけたり，学んだ語彙や文法を実際に使うことで習得したり，英語の力を向上させたいと感じていることが明らかになった。

4　コミュニケーションの理解度

授業での英語コミュニケーションの理解につい

ての回答は，Table 3 の通りである。

Table 3　コミュニケーションの理解度

(n=76)	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
おおむね理解できている	5	4	3	6	4	3	6	2	2	34
時々理解できないことがある	4	5	3	5	5	3	5	7	4	39
ほとんど理解できていない	0	1	0	0	0	1	0	1	0	3

理解度に関しては，習熟度上位グループの方が下位グループよりも「おおむね理解できている」と回答した割合が高く，習熟度の差よってコミュニケーションの理解度の自己評価が異なることがわかった。

「時々理解ができないことがある」と回答した生徒は，ほぼ同じ割合で「英語」「やりとりの内容」「文字化されなかった情報」の理解が難しいと答えた。「英語」の理解には文法，構文，語法，会話表現，語彙等の理解が含まれ，「やりとりの内容」は知識を基にした内容の理解が含まれる。「文字化されなかった情報」は，生徒の英作文に対して英語ネイティブ講師が口頭でコメントを述べたり，質問をしたりするとき，あるいは生徒が口頭で英語ネイティブ講師に話しかけた際のやりとりの内容を指すと考えられる。(Table 4)

Table 4　理解が難しいこと

	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
英語	3	4	2	5	0	1	1	4	1	21
やりとりの内容	3	2	1	2	2	2	2	4	2	20
文字化されなかった情報	1	2	1	1	4	0	2	3	2	18

5　英語コミュニケーション能力

英語コミュニケーション能力の向上に関する質問には，8 割を超える生徒が，自分の英語力が「非常に高まった」「どちらかと言えば高まった」と回答した。(Table 5)

Table 5　英語力の向上

(n=76)	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
非常に高まった	2	2	1	4	2	0	0	4	1	16
どちらかと言えば高まった	6	6	3	6	6	6	7	3	2	45
どちらかと言えば高まっていない	1	2	1	1	1	1	2	2	3	14
全く高まっていない	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

更に，生徒が自身の英語コミュニケーション力のどのような側面が向上したと自己評価しているのかについても調査した。(Table 6)

Table 6　授業を通して高まった能力

	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
(聴覚活用による)リスニング	2	2	2	4	3	2	1	0	1	17
(文字化による)リスニング	4	3	2	5	5	0	1	4	1	25
スピーキング力（その場で発言する力）	5	5	0	6	4	1	2	2	0	25
ライティング力（時間をかけて英作文をする力）	5	1	1	5	5	2	5	3	2	29
海外の政治、文化、歴史等に関する知識	5	4	2	5	2	2	2	3	0	25
英語でやりとりをすることへの慣れ	7	6	0	6	4	3	4	6	1	37
海外のことを知りたいと思う意欲	2	3	3	8	2	3	5	2	2	30
日本のことを海外に発信したいという意欲	1	0	0	3	1	0	2	1	0	8

最も多くの生徒が高く自己評価した点は「英語でやりとりをすることへの慣れ」だったが，習熟度下位グループではこの側面を挙げた人数が少ない。「スピーキング力（その場で発言する力）」に関しても習熟度下位グループで同様に人数が少ないという傾向が見られる。習熟度下位グループでは習熟度上位グループと比較して iMessage を使ったやりとりを行う頻度が低かったことが影響していると考えられる。

「海外のことを知りたいと思う意欲」が高まったと回答した生徒の比率が特に高かったのが 2 学年の習熟度上位グループである。このグループは，英語ネイティブ講師に「もっと頻繁に来てほしい」と回答した生徒の比率も高かった。海外のことを知ることができたため，もっと頻繁に来てほしいと感じていると推測できる。

生徒が授業を通して高まったと評価した能力（Table 6）と生徒が今後，授業を通して高めていきたいと希望する能力（Table 7）を比較すると，ほぼすべての側面において回答者数が増加している。このことから，生徒たちが英語ネイティブ講師と日本人英語教師のティーム・ティーチングを通して，英語コミュニケーション力の向上を期待をしていることが読み取れる。特に，「(文字化による）リスニング」「スピーキング力（その場で発言する力)」「ライティング力（時間をかけて英作文をする力)」の伸びを期待しているようである。

Table 7　今後高めたい能力

	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
(聴覚活用による) リスニング	5	4	3	6	3	2	2	2	0	26
(文字化による) リスニング	5	8	1	8	7	3	4	4	2	42
スピーキング力 （その場で発言する力)	9	7	3	11	7	5	5	6	0	53
ライティング力 （時間をかけて英作文をする力)	6	8	3	8	7	4	6	5	4	51
海外の政治、文化、歴史等に関する知識	5	6	1	4	0	0	1	2	3	22
英語でやりとりをすることへの慣れ	8	7	3	8	5	2	5	8	3	49
海外のことを知りたいと思う意欲	6	5	1	5	0	1	2	3	2	25
日本のことを海外に発信したいという意欲	2	2	2	3	1	0	0	2	1	13
英語のタイピング	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1

6　コミュニケーション手段

高等部普通科の生徒の日本語でのコミュニケーションについてであるが，音声や口話を主にコミュニケーション手段としている生徒，手話を主なコミュニケーション手段にしている生徒，さまざまな方法を組み合わせてコミュニケーションをとっている生徒がいる。生徒が授業で英語を聞くときに参考にしている情報と，英語話者とコミュニケーションをとる際に使いたいと希望している手段については Table 8 及び Table 9 の通りである。

Table 8　英語を聞くときに参考にしている情報

	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
音声	9	9	4	9	6	6	6	9	3	61
口形	5	8	4	10	6	6	6	7	3	55
手書きの文字や絵	9	9	5	11	9	7	8	9	6	73
iMessage	9	9	3	10	9	7	6	9	5	67
身振り ジェスチャー	1	0	0	0	0	0	1	1	0	3
日本語対応手話	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
日本人教師の通訳	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1

Table 9　英語を話すときに使いたい手段

	1-イ	1-ロ	1-ハ	2-イ	2-ロ	2-ハ	3-イ	3-ロ	3-ハ	合計
音声	8	6	4	10	8	6	7	7	4	60
手書きの文字や絵	9	10	5	11	9	7	9	9	5	74
iMessage	9	9	5	10	9	7	7	10	6	72
身振りジェスチャー	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2

多くの生徒が文字情報と音声情報の両方を参考にしながら英語ネイティブ講師と日本人英語教師のティーム・ティーチングの授業を理解している。更に，全生徒の７割を超える 55 名が「口形」を参考にしながら英語を理解している。質問紙の問 7 で，「音声」または「口形」を全く参考にしていないと回答した生徒はそれぞれ 15 名，21 名だった。

文字情報のみを頼りにコミュニケーション活動を行っている生徒がいる一方で，かなりの割合の生徒が，口話で英語を読み取ろうとしていることがわかる。更に，生徒が，自分が話す際に使用したい手段も，英語を聞くときに参考にしている情報とほぼ変わらないという結果が得られた。

７　まとめと今後の展望

質問紙調査結果の分析及び日本人英語教師が日々の授業を通して実感している生徒の様子,及び生徒の要望から，以下の 3 点が今後の授業内容や方法を検討したり，ICT 活用を工夫したりする際の課題になると考える。

1 点目は，英語ネイティブ講師の来校時数を増やし、それぞれの学習グループでティーム・ティーチングを行う時間を増やすことである。1 時限 50 分という限られた時間の中で英語ネイティブ講師が 3 つの習熟度別学習グループを廻っているのが現状である。その状況で，多くの生徒は自身の英語力の向上を感じており，今後は更に向上させたいと回答している。現行教育課程ではコミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと英語表現Ⅰ・Ⅱ，新教育課程では英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲと論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの両方に英語ネイティブ講師とのティーム・ティーチングを導入し，各科目でどのようなコミュニケーション方法を用いてどのような力を体系的に身につけさせていくかを検討する必要がある。

2 点目は，習熟度下位グループの生徒にとって英語でのコミュニケーションがよりわかりやすくなるための工夫や，コミュニケーションの基礎となる英語力を養うことである。文字や絵等を混在させて，1 枚のシート上でコミュニケーションを可視化できる「しゃべり描き」は，習熟度下位グループのコミュニケーション活動に有効だろう。

3 点目は，すべての生徒が授業をより理解できるように，「文字化されない情報」を減らす工夫である。口話で英語をある程度理解できる生徒がいる場合，ネイティブ講師も口話のみで応えがちになってしまうが，学習グループ全体のコミュニケーション力を向上させるためには，音声情報と文字情報を同時に提供することが必須である。

〔謝辞〕

本研究で報告した取り組みは、本校普通科で講師を務めていただいているエリス・イアン・ヴァン氏の多大なご協力によるものである。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

松本邦子　田万幸子　澤口真弓　大平真奈美（2021）ICT を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する英語の授業実践 ～文部科学省特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）報告～．筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要　第 43 巻，55-61.